

櫻井本『夢想之連歌』訳注（四）

伊藤伸江・奥田 勲

宗祇の句集『宇良葉』には、集の末尾に三種類の独吟百韻が置かれている。このうち二番目の百韻である『夢想之連歌』の訳注を試みており、本稿では、百韻の第五十一句から第百句までを注釈する。本稿は伊藤が作成し、奥田との検討会議を経たものである。

【凡例】

一、底本は、櫻井健太郎氏本『宇良葉』に付載された宗祇の『夢想之連歌』である。対校本は次の諸本を参照している（ゴシック体は略号である）。「櫻井本『夢想之連歌』訳注（二）」に諸本の説明をなしているので、必要に応じ参照されたい。

- ①早 早大伊地知文庫『古連歌』本（文庫20／26）
- ②書 書陵部『古連歌集』本（353－41）
- ③大 大阪天満宮『名家連歌』本（大阪天満宮文庫69－25－1）
- ④夢 東大国文学研究室蔵本（中世12－7－2）
- ⑤歴 国立歴史民族博物館高松宮旧蔵本（H－600－1486△函181）

- ⑥ 宗 書陵部『宗祇独吟連歌』本(154・515)
- ⑦ 北 北海学園大学北駕文庫本(文365)
- ⑧ 東 東大国文学研究室蔵『連歌名句』本(D 1613)
- ⑨ 広 広島大学福井文庫本(国文/5051/N 70)
- ⑩ 静 静嘉堂文庫本(連歌集書29所収本)
- ⑪ 甲 大阪天満宮(れ一甲一6)本
- ⑫ 小 小松天満宮蔵『集懷紙』本
- ⑬ 滋 大阪天満宮滋岡文庫本(れ一5一34)
- ⑭ 鳥 太宰府天満宮蔵小鳥居家本(連歌74一72)
- ⑮ 天 天理図書館綿屋文庫本(れ4・2一41)

一、注釈本文は、読解の便をはかるため、底本を歴史的仮名遣い表記にあらためて清濁を付した。原文は翻刻(「櫻井本『夢想之連歌』訳注(一)付翻刻」(愛知県立大学日本文化学部論集)第十一号・2020・3)を適宜参照された。注釈本文においては、原文の表記の誤りと考えられる箇所はあらため、あて字、異体字、送り仮名は標準的な表記に直して示した。漢字表記が自然である語句に関しては、全体の統一を考えて漢字に直し、難読語句には、校注者が括弧書きで振り仮名を付し、踊り字はすべて開いている。校注者による改訂部分のうち、特記すべきものは、注釈内に付記した。

一、【校異】においては、底本の翻刻に対して、前掲対校本の番号により、校異を示した。表記による違いはとらなない。また、⑬の右傍に存する、読みにくい文字の読みがなと見られる書き直しの朱書きは校異に入れないが、異本注記と思われる朱書きは校異に入れている。また、⑧には式目関係の頭注が存するが、校異には入れず、必要に応

じて訳注で触れることとする。⑪⑬のルビは朱書である。

一、各句には、百韻全体の通し番号を句頭に示し、参考として、各懐紙内でのその句の所在を懐紙の順、表と裏の別、表裏ごとの句の番号で表し、前句を添えた。

一、【語釈】にあげる和歌、連歌例は、後述引用文献による。百韻の読解に有効な際には、先例のみならず後代の作品も例示する場合がある。私に清濁を付し、片仮名など読解に不便な文字は必要に応じ平仮名に改め、漢字表記が自然である語句に関しては、全体の統一を考えて漢字に直した場合がある。

一、各句には、【式目】【語釈】【現代語訳】の説明項目を設けると共に、二句一連の連歌の中で句がどのように作用するか、及び独立した一句ではどんな意味を持つかに配慮して【現代語訳】の他に【付合】【一句立】の項目を設けた。さらに必要な場合には、【考察】【補説】【他出文献】の項目も設けた。

(三折・表・一) 小萩うつろふいねがての里

五十一 しほるなよ身に今よりの秋の風

【校異】 なよ…⑤⑥などか⑨⑩など 身に…②身を⑪身に

【式目】 秋(秋の風) 身(人倫)

【語釈】 ○しほるなよ…しおれてしまふなよ。「しほる」は、ラ行下二段動詞、草木が風・霧・露などのためにたわみ、だらりとすること。さらには濡れしおれること。また、人が元気をなくすこと、涙に濡れ、しょんぼりすること。この語を用いた歌「しをるなよ月をば袖の秋のよにもしほたれつすまのうら人」(院御歌合宝治元年・海辺月・108・俊成卿女)は、「わくらばにとふ人あらばすまの浦にもしほたれつわぶとこたへよ」(古今集・雑下・962・在原行平)を本歌にしており、侘しく気弱な思ひにかられている浦人に呼びかけている。五十一句においても、呼びかける相手は、秋風が吹く以前に、既に心弱る思ひに駆られている相手である。「秋やさひしき志かの古里／衣打佐野の浦かせしほるなよ

／あふみの海にあらぬ我袖」(寛正五年正月一日名所百韻・24／25／26・宗祇)。○「今よりのの：これからの。「今よりのはぎの下葉もいかならんまづいねがての秋風ぞふく」(続後撰集・秋上・建保二年内裏秋十五首歌合に、秋風・参議雅経・268)。○「秋の風：人の心をうら寂しくさせ、身にしむ気持ちを起こさせるものである。「身にしみて物のかなしきゆふくれにいと、吹そふ秋の風かな」(伏見院詠草(東京国立博物館蔵)・秋夕・266)。「身をもなみたにひたす手枕／いねかての袖のうへこす秋の風」(美濃千句第四百韻・58／59・専順／宗祇)。

【付合】付合では、季節の推移につれて、里の萩がうら枯れていく様子を描く前句に、「しをる」を縁に、その里で悩み寝られずにいる人への思いを呼びかけの形で表現した。

【二句立】しおれてしまふなよ。その身に、これから心を寂しくさせる秋の風が吹くとしても。

【現代語訳】小萩が色あせ枯れていき、肌寒くなって人はなかなか寝つけない、そんな里。つらい物思いにしおれてしまふなよ。その身にこれから心を寂しくさせる秋の風が吹くとしても。

(三折・表・二) しほるなよ身に今よりの秋の風

五十二 夕こえくれば山ぞかさなる

【校異】ナシ ※④はこの句を36句と37句の間にも重出している

【式目】旅(こえくれば) 山(山類・体) 夕(時分)「旅の心、：山こえて」(連珠合璧集)

【語釈】○「夕こえくれば：夕暮れに山を越えてくると。和歌では、越えた山の名に続いてこの語句を使うのが一般的であるが、ここは名もない山を越えて、また山に入る道のりである。やや仰々しい言い方になる。「みやまべをゆふこえくればしひしばのうれ葉につたふたまあられかな」(六百番歌合・冬十八番右・椎柴・中宮権大夫・576)。「嵐はよはる野辺のかりふし／山遠く夕越くれは月いて、」(老葉(毛利本)・旅連歌・627／628)。○「山ぞかさなる：山々が重なり続いている。「花に来て舟出やすらむ比良の海／なをしら雲に山そかさなる」(明応九年七月六日何船百韻「柳ふく」・31

／ 32・宗祇／吉感。

【付合】五十句に「いねがて」、五十一句に「秋」とあり、恋の含意を発展させることもできたが、そうはせず、旅連歌を付けて進む。

【二句立】夕暮れに山を越えてくると、また山が重なっている。

【現代語訳】ぐったりしてしまふなよ。これから秋になる、その秋風が身近に吹く中、夕暮れに山を越えてくると、その先にまた山が重なっている。

(三折・表・三) 夕こえくれば山ぞかさなる

五十三 ふりそむる朝の雪に駒なべて

【校異】駒なへて…⑤駒 へて⑧駒なへて⑩駒なへとめて⑫駒とめて⑬駒なへとめて
朝の…⑮朝けの

【式目】冬(雪) 駒(動物) 獣与獣(可隔五句物)

【語釈】○ふりそむる…降り始めている。「木たかき松のたてる山もと／ふりそむる雪も峯をやうつむらん」(文明八年四月二十三日何船百韻「ことの葉の」・72/73・宗祇)。○朝の雪…狩場の情景、旅の朝の出立の情景に詠まれることが多い。「とは、や分る野辺の遠近／つもるへき晨の雪に駒とめて」(太神宮法楽千句第一百韻・6/7・宗長独吟)。○駒なべて…馬を並べて。「こまなべて朝こえくれば春山のさきのをすゑにひばり立つなり」(瓊玉和歌集・春下・文永元年十月御百首に・85)。「かりはの末に鳥のたつ声／雪白き野を朝ふませ駒なへて」(壁草・雑上・1667/1668)。

【付合】「夕」に「朝」を相対させ、時刻も一新した。

【二句立】降り始めた朝の雪の中、馬を並べて進んでいく。

【現代語訳】夕暮れに山を越えてくると、また山が先に重なっている。次の朝には、降り始めた朝の雪の中、馬を並べ

て進んでいく。

〔三折・表・四〕 ふりそむる朝の雪に駒なべて

五十四 枯野をとふはただ宮こ人

【校異】 とふは…⑮とへは 宮こ人…③古人

【式目】 冬(枯野)宮こ人(人倫)

【語釈】 ○枯野：冬に草枯れた野原。人を立ち止まらせる様なものは何もない。「離れ」を掛ける。「わがやどは人もかれののあさぢはらかよひしこまのあともとどめず」(六百番歌合・恋下・寄獣恋・1064・藤原家隆)。○宮こ人：都の貴人。田舎を訪れることは稀であり、訪れるとしても桜の時期と認識されている。「都人けふはとふやとまたれしもたえてすぎ行く三わの山もと」(洞院撰政治家百首・山家・270・藤原家隆)。「みやこ人とふことなしの草の葉もいま霜がれの冬のさびしき」(新撰和歌六帖・ことなし草・2073・藤原知家)。「まつらめやいて、程ふる宮こ人／ひなの長路のはつ雪の比」(宝徳四年千句第七百韻・71／72・日晟／宗砌)。「此まゝに添へ又待もうし／稀にとふ我山里の都人」(竹林抄・雑連歌上・1270・宗砌)。「ゆくはうらみんことほりもなし／花にこそ山里もとへ都人」(萱草・150／151)。

【付合】 駒を並べてやってきた人物を、枯野には珍しい都人であると付けた。光源氏を須磨に訪れた頭中将の姿のような、物語的な光景。

【二句立】 枯野を訪れているのは、まさに都人だ。

【現代語訳】 降り始めた朝の雪の中、馬を並べて枯野を訪れているのは、まさに都人だ。

〔三折・表・五〕 枯野をとふはただ宮こ人

五十五 やぶしわかずもとめば梅や花もみむ

【校異】なし

【式目】春(梅)

【語釈】○やぶしわかず…藪をも區別せず。藪は、草木や竹などが手入れされずに生い茂っている場所。「し」は強意。

「日のひかりやぶしわかねばいそのかみふりにしさとに花もさきけり」(古今集・雑上・870・ふるのいまみち)。「いそのかみふるさとにしもさく梅の匂ひを風そやぶしわかさる」(年代和歌抄・梅風・228)。「やぶしわかぬ春日に、ほへ宿の

梅」(老葉(毛利家本)・発句・草庵の会に、梅を・1565)。○もとめば…求めるなら。探すなら。「とにかくにもとめばな

ほやまよはまし心のみちの三世の行へを」(玄恵追善詩歌・一体同歎分・34・権律師慶運)。

【付合】日の光がどんなどころにもくまなくさすことに多く使われる「やぶしわかず」を、枯野を訪れた都人が、梅を探し求めるさまにとりなした。都人だけが枯野を訪れる前句の謎を、枯野の藪の中までも梅を探し求める風雅な心ゆえと解く。

【一句立】藪をもくまなく探し求めるならば、梅の花も見る事ができるだろうか。

【現代語訳】枯野を訪れているのは、まさに都人だ。枯野の藪もくまなく探し求めるならば、梅の花も見る事ができるだろうか。

(三折・表・六) やぶしわかずもとめば梅や花もみむ

五十六 あせたる村の春さむきかけ

【校異】 あせたる…⑨⑩あけたる⑪⑫⑬やせたる むら…⑭むら^村

【式目】春(春さむき)

【語釈】○あせたる村…(村に)人もおらず、荒れて活気のない様子。「褪す」は衰えること。和歌・連歌の用例では水の干上がった「あせたる池」が詠まれ、「村」を続けるのは他に例がない。「古寺にほたるみたる、庭の草／あせたる池

の月そすくなき」(表佐千句第二百韻・41/42・清玉/専順)。校異では、「やせたる」「あけたる」がある。「遠き野に瘦たるむらのうす煙/木こる翁のたとるやま道」(河越千句第六百韻・15/16・長敏/宗祇)。○春さむき…早春でまだ寒く。「春の始の心ナラバ、…春さむし」(連珠合璧集)。「春さむき雪は匂ひにうつもれてそらに天ぎる梅の下風」(後大通院殿御詠・梅風・179)。「雪散まよひ春寒き空/山はまた去年の嵐に月すみて」(萱草・雑連歌・こゝかしこの会の連歌のうち・1005/1006)。「春さむしさくさへこそその梅のはな」(基佐集(斑山文庫本)・発句・1272)。「花はのこらすあらしふくかけ/春さむきはやくの梅ハミなさきて」(基佐集(斑山文庫本)・春・31/32)。

【付合】藪のありかを寂れた村と付けた。

【二句立】人もいない荒れた村の、春浅く、寒々とした物陰。

【現代語訳】藪までくまなく探し求めれば、梅の花も見る事ができるだろうか。人もいない荒れた村の、春浅く、寒々とした物陰で。

(三折・表・七) あせたる村の春さむきかけ

五十七 ひまかこふ軒ばのかすみ衣かせ

【校異】かこふ…①②④かよふ 軒はの…④軒は

【式目】春(かすみ) 軒端(居所・体) 霞(聳物)

【語釈】○ひま…隙間。絶え間。身ひとつをかくしかねたる草の庵/雨しけくもる軒のひま〜(因幡千句第五百韻・37/38・承世/清玉)。「重ては風もふせかんあさ衣/さゝの軒はの隙しけきかけ」(称名院追善千句第八百韻・95/96・紹巴)。○軒ばのかすみ…軒のあたりに立ちこめた霞。「あさあけの軒ばのかすみふかけれど木のもとかき梅がかぞする」(為理集・檐梅・15)。「いほりならふる遠の山さと/立こめし軒端の霞かせ吹て」(園塵・春・1322/1323)。○衣かせ…衣を貸してくれ。「衣」は霞のかかる様子から、霞を衣服に見立てて詠んだ表現。和歌では必ず「衣かせ山」

で詠む(↓五十八句【付合】)。「春きても川風さむしみかの原たつや霞のころもかせ山」(新葉集・春上・山霞といふ事を・23・右近大將長親)。

【付合】未だ寒い早春を詠む前句に、霞の衣を付けた。

【二句立】軒の隙間を囲むようにかかっている霞よ、寒さをしのぐ衣を貸してくれ。

【現代語訳】人もいない荒れた村の、春浅く、寒々とした物陰。軒の隙間を囲むようにかかっている霞よ、寒さをしのぐ衣を貸してくれ。

(三折・表・八) ひまかこふ軒ばのかすみ衣かせ

五十八 山にも身こそかくしわびぬれ

【校異】ナシ

【式目】雑 山(山類・体) 身(人倫)

【語釈】○山…ここは前句から「鹿背山」と続けた。鹿背山は、京都府相楽郡木津町と加茂町にまたがる山。山城国の歌枕。「都いでて今日みかの原いづみ河かは風さむし衣かせ山」(古今集・羈旅・408・よみ人しらず)。「末にぞ里を今日みかの原/宿もなし衣かせ山一夜寝む」(新撰菟玖波集・羈旅連歌上・多々良政弘朝臣・2178/2179)。

【付合】前句の「衣かせ」に付句で「山」を続け、「鹿背山」を詠みこんで、付句に続ける。

【二句立】山にあってもこの身を隠せず困っていることよ。

【現代語訳】軒の隙間を囲むようにかかっている霞よ、衣を貸しておくれ。衣を貸してほしいと思う鹿背山まで来ても、山にこの身を隠すこともできず困っていることよ。

(三折・表・九) 山にも身こそかくしわびぬれ

五十九 おもひたつひとへ心に世をいでて

【校異】 おもひたつ…⑩思ひたち いてゝ…①②⑦⑧捨て⑮すてゝ ⑩出^替て⑬出^替て ひとへ心…⑨ひとつ心⑩ひとつ心⑪ひとつ心⑬ひとつ心

【式目】 釈教(世をいでて)

【語釈】 ○ひとへ心…ひたすらな気持ち。変わりのない気持ち。ここは「思ひたつ」人」と掛ける。「やへだにもあだにみえけるやまぶぎのひとへ」ころをおもひこそやれ」(斎宮女御集・64)。「かくれかにひとへ」ころはかひもなし／はるとのみやはみよしののあき」(春夢草・雑・713/714)。「冬咲や一重心の梅の花」(竹林抄・発句・早梅を・1833・専順)。○世をいでて…俗世を離れて。「いほりならふる山かけもうし／侘ぬれは我も畑うつ世を出て」(菅筵・1867/1868)。

【付合】 隠棲することの難しさに、性急な出家時には気づかなかつたとつける。

【一句立】 思い立った人が、ひたすらな気持ちで出家をして。

【現代語訳】 山まで来ても、世間を離れてひっそりとくらすこともできず困っていることよ。出離を思い立った人が、ひたすらな気持ちにかられ、俗世を逃れたけれども。

(三折・表・十) おもひたつひとへ心に世をいでて

六十 あさきをきくも法ならずやは

【校異】 あさき…③あき□きく…⑤⑥きる も…①は ならず…①ならぬ

【式目】 釈教(法)

【語釈】 ○あさき…初心者(初心者)が理解できるようにやさしく説いた仏法の教え。理解を進め、深い教えに至る。「世の中をいとふ心もあさきより深きにうつれ墨染の袖」(公義集・述懐・291)。「引つゝけたる牛の小車／浅より深きを得るや法な

らん」(池田千句第八百韻・12/13・宗哲/宗碩)。「あさきよりふかきに法をうけつきて/かしこき人そ仏をもしる」(明応九年五月七日何路百韻「またきより」・43/44・聖護院准后/勸修寺中納言)。○**法ならずやは**…仏の教えでないことがあるうか、いや、教えである。「かりにふれしものりならずやは/やまのはのつきはあふきをなこりにて」(宗祇関係 含翠堂文庫蔵老葉付載宗祇付句28)。

【付合】「ひとへ」の縁で「あさき」をよびこむ。

【一句立】浅い教えを聞いたとしても、それは仏の教えでないことはあろうか。

【現代語訳】 思い立った人が、ひたすらな気持ちで世を逃れて、浅い教えを聞いたとしても、それは仏の教えでないこととはあろうか。

(三折・表・十一) あさきをきくも法ならずやは

六十一 わたれ人舟待つ程の水もなし

【校異】 わたれ…⑪⑬わたれ_れ

【式目】 雑 人(人倫) 舟(水辺・体用之外(新式今案)) 水(水辺・用)

【語釈】 ○**わたれ**…川(などの水路)を渡れ。「わたりする舟まつほとやうかるらん/あまの河原のけふの夕暮」(老耳・1572/1573)。○**舟待つ**…渡し舟を待つ。向こう岸からこちらに行き来する舟を捕まえる。「川端に居つつ、渡し舟待つ程に、東路の隅田川ならずとも、言問ふ鳥もがなと打ち眺めらる。」(春の深山路・墨俣)。

【付合】 前句の「浅き」を浅瀬のさまとし、旅の途中、水路を渡る様子にとりなした。

【一句立】 みんな、渡りなさい。舟を待つ程度の水深もないのだから。

【現代語訳】 浅いと聞いたら、それを渡る決まりはないことがあるうか(渡る決まりだ)。みんな、渡りなさい。舟を待つ程度の水深もないのだから。

〔三折・表・十二〕 わたれ人舟待つ程の水もなし

六十二 晴るるもいでぬ五月雨の宿

【校異】 はるゝ…⑫晴て

【式目】 夏（五月雨） 五月雨只一 梅雨一（降物・一座二句物） 宿只一 旅一（一座二句物）

【語釈】 ○晴るるも…晴れたから。「も」は強意。五月雨の際には、曇り空が続く。「きのふけふちさとのそらもひとつにてのぎばにくもるさみだれのやど」（秋篠月清集・天象・203）。○五月雨の宿：五月雨の雨宿りの宿。また、五月雨に降り込められている家。「はれまなくふりこめられて友もみなうとき心の五月雨の宿」（草根集・五月雨・9358）。「哀にも新島守と身をなして／川水めくる五月雨のやと」（園塵第四・夏・4622／4623）。

【付合】 川渡りのための宿を付ける。

【一句立】 ちようど晴れて、出てきたことだ。五月雨を止ませるために入っていた宿を。

【現代語訳】 みんな、渡りなさい。舟を待つ程度の水深にもなっていないから。ちようど晴れて、人々が、五月雨の雨宿りの宿を出てきたところだ。

【他出文献】 第六十二句・六十三句の付合は、『下草』（初編本第一種（書陵部本 881・882）、草稿本（龍谷大学本）、初編本第二種（金子金治郎本）、再編本（東山御文庫本））に入る。

（三折・表・十三） 晴るるもいでぬ五月雨の宿

六十二 月ぞうき雲のいづこにふけぬらん

【校異】 月そ…③月よ⑦⑧月も 雲の…⑧雲も いつこ…①④⑫いつくらん…⑭ら□

【式目】 秋（月） 雲（簞物） 雲如此簞物（可隔三句物） 月（可隔三句物）

【語釈】 ○月ぞうき…月の恨めしいことよ。「長き夜寒み我が床の上／月ぞ憂き人は誰とか惜しむらん」（寛正六年正月

十六日何人百韻・72／73・專順／心敬。「暁起きに慣るゝ夜な〜／月ぞうき幾歸さに残るらむ」(竹林抄・恋連歌上・782・心敬)。○雲のいづこに…雲のどのあたりに。「夏の夜はまだよひながらあけぬるを雲のいづこに月やどらむ」(古今集・夏・月のおもしろかりける夜、あかつきがたによめる・166・清原深養父)。「吹風は雲のいつこに残らん／月の心もしつかなるそら」(文明十四年三月二十日何人百韻「ちぎりあれや」・97／98・調阿／宗祇)。

【付合】地上で五月雨に降り込められた人の宿から、雲の上の月の宿へと思いを馳せた。前句では人は宿を出ており、付句では月は雲から出ない点の対比もある。

【二句立】月の様子が恨めしく思われることよ。雲のどのあたりに隠れたまま、夜が更けていつているのだろう。

【現代語訳】ちようど晴れて、五月雨に振り込められていた宿を出たことだ。自分は宿を出ても、月は雲から出てこないのが恨めしいことよ。今ごろ月は雲のどのあたりにいて、夜が更けているのだろうか。

(三折・表・十四) 月ぞうき雲のいづこにふけぬらん

六十四 夜は冷やややかに蛍飛ぶ空

【校異】そら：①②⑦⑧⑪⑫かけ⑬空^か⑭□(破損)

【式目】秋(蛍・冷ややか) 蛍(一座一句物)「秋の心…ひやゝかなる(風水など)」(連珠合璧集)。

【語釈】○冷ややかに…(夜の空気は) ひんやりと冷たく。宗祇は本百韻と時期の近い小松原独吟百韻において晩秋の風の冷たくなる頃に、心に広がる寂しい思いを詠み入れている。「我心月はしるやとかげさびて／風ひやゝかに秋ふくる比」(延徳四年六月朔日小松原独吟百韻・65／66)。○蛍飛ぶ空…「蛍飛ぶかげ」とする伝本も多い。「影は霧間の蛍とふ空／むら竹の露こほれつゝそよく夜に」(玉屑集・1976／1977・紹巴)。

【付合】前句の「雲のいづこ」から、「雲の上」を想像し、「蛍」を付けた。伊勢物語四十五段も思わせる付け。「蛍トアラバ、…雲の上」(連珠合璧集)。

【一句立】夜はひややかにふけて行き、空には蛍が飛んでいる。

【現代語訳】月の恨めしいことよ。雲のどのあたりに隠れたまま更けていつているのだろう。夜はひんやりと冷たく、空には蛍が飛んでいる。

(三折・裏・一) 夜は冷ややかに蛍飛ぶ空

六十五 荻に風言はぬ思ひのこたへして

【校異】 して：⑭□□(破損)

【式目】 秋(荻) 思ひ(恋) 荻只一 夏冬に一 やけはら一 (一座三句物) 風(吹物)

【語釈】 ○荻に風：荻は風に応えて音を立てるもの。「荻トアラバ、秋風」(連珠合璧集)。「をぎのはにこととふ人もなきものをくる秋ごととにそよとこたふる」(詞花集・秋・117・敦輔王)。「荻トアラバ、秋風」(連珠合璧集)。「夕月よあかぬ名残のひややかにをぎの音聞く風のさやけさ」(柏玉集・荻風・653)。○言はぬ思ひ：口に出さない思い。慕情を示唆する。「人しれずいはぬ思ひのわびしきはただに涙のぬらすなりけり」(貫之集・648)。口に出す思いよりも強いとされる。「こころにはしたゆく水のわきかへりいはで思ふぞいふにまされる」(古今和歌六帖・いはでおもふ・2648・詠み人知らず)。付合からは、蛍の「言はぬ思ひ」(「火」を掛ける)であり、蛍の光が示す慕情の思いとなる。「ひるはきえ暮るればもゆる夏虫のいはぬ思ひをそれとしらなん」(宝治百首・寄虫恋・2906・祝部成茂)。「夏むしのいはぬおもひをそれとだにしらればなにに声ももらさん」(宗祇集・言出恋・192)。

【付合】 蛍から「思ひ」を詠み込み、付句で恋のイメージを強めつつ付けている。「蛍トアラバ、思」(連珠合璧集)。「夕殿蛍飛思悄然」(長恨歌)。言葉では伝えられない「言はぬ思ひ」を持つものとして、「蛍」を出し、風にそよぐ音を立てて「言はぬ思ひ」に応えるものとして、「荻」を出した。鑑賞する側は、闇に蛍の光を見る前句に、荻のそよぐ音を聴く付句となり、視覚から聴覚へと印象が変わる。なお、和歌においては、荻に吹く秋風は、荻に「飽き」を告げて

くるものであり、次の句では「言はぬ思ひ」が、自分から離れてしまった恋人の気持ちとなる。(↓六十六句) 【付合】

【一句立】 荻に風が吹いて、そよぐ音で口に出さない思いに応えていて。

【現代語訳】 夜はひんやりと冷たく、空には、螢が飛び、言葉にならない螢の思いの火を見せている。荻には風が吹いて、そよぐ音で螢の口に出さない思いに応えている。

(三折・裏・二) 荻に風言はぬ思ひのこたへして

六十六 夕のしらばいかにしのぼむ

【校異】 しらは：①⑭空は ②そらは ⑨とはは ⑩とは、 いかに：①②③④⑤⑥⑧いかゝ⑪いかゝ、⑮いかゝ、

【式目】 恋(しのぼむ) 夕(時分)

【語釈】 ○いかにしのぼむ：どんな風にして耐えようか。「あはれ又いかにしのぼむ袖のつゆ野原の風に秋はきにけり」(新古今集・秋上・294・右衛門督通具)。校異には「いかがしのぼむ」が多く見られる。

【付合】 前句で、荻をざわめかせる風は、元来は秋風ゆえに「飽き」を知らせるものであり、「言はぬ思ひ」は、恋人が自分に飽きたということになる。「荻トアラバ、：秋とつげつる」(連珠合璧集)。「秋来ぬと松吹く風も知らせけりかならず荻の上葉ならねど」(新古今・秋上・306・七条院権大夫)。

【一句立】 もしも夕暮れになって分かったならば、どんな風に耐えたら良いのだろうか。

【現代語訳】 荻には秋風が吹き、荻のそよぐ音は、秋風が口に出さない思いに応えている。その「秋」がきて、あの人が私に飽きてしまったという思いは、夕暮れになり、あの人が来ないことがわかったら、どんなふうにしてこらえたらいいだろうか。

〔三折・裏・三〕 夕のしらばいかにしのばむ

六十七 待うかれ我やゆかむの道の辺に

【校異】 に：⑭□（破損）

【式目】 恋（待うかれ） 我（人倫）

【語釈】 ○待うかれ：あの人を落ち着いて待ってられないで。「おもかげは身をもはなれぬかたみにてゆふべになればまちうかれつつ」（茂重集・夕恋・151）。「待ちうかれいでにしままにいく里のゆふつけ鳥を月にきくらむ」（宗祇集・宗匠家月次三首に、終夜見月・124）。「待うかれ月にとひし夜は更て／ひとりやねなん秋風そふく」（長享二年四月五日何路百韻「あらぬなを」・83／84・寿官／宗長）。○我やゆかむ：私が行こうか。「君やこむ我やゆかむのいさよひにまきのいたどもささぎずねにけり」（古今集・恋四・690・詠み人知らず）。「人は人待つらむものをこの夕べ／我や行かむも思ひ絶えにき」（新撰菟玖波集・恋連歌上・1465／1466・後三条入道前左大臣）。「こやともいまはえこそいはれね／深にけり我やゆかんもはかなくて」（下草・恋連歌上／617・618）。

【付合】 相手がきてくれるかも知れないと僅かな期待を持ち、自ら出かけはしてもまだ逡巡する思いを付句で表現した。

【一句立】 あの人を落ち着いて待ってられないで、いつそ私が行こうかと思っている、そんな道のほとりで。

【現代語訳】 あの人を落ち着いて待ってられないで、いつそ私が行こうかと思っている、そんな道のほとりで、夕暮れとわかったら、どんなふうにしてこらえたらいいだろうか。

【他出文献】 六十六句・六十七句は、『下草』恋連歌上 619・620（619句「いかゝしのはん」）に入る。

〔三折・裏・四〕 待うかれ我やゆかむの道の辺に

六十八 見えばや人も心なからじ

【校異】 見え：③見へ

【式目】恋(見え) 人(人倫)

【語釈】○見えばや…現れて欲しい。その結果として、自分の方も会いたい。「見ゆ」は目に入ること。「したふをや猶あやなくにいとふらん／おもはぬかほ、せめてみえはや」(下草・恋連歌下・733/734)。「一筆に見えばやこころことはをつくしていはばかぎりもぞなき」(宗祇集・恋・「草庵にて歌よみ侍りしに、通書恋・202)。「心なからじ…無情であるはずはない。心があるだろう。「心なし」は、情愛を解さない。「心なしと見る者も、よき一言は言ふ物なり。」

〔徒然草〕第四百四十二段)。「生ける物皆心なからじ／神は世に光を放つ八幡山」(竹林抄・雑連歌下・1530・専順)。

【付合】来てほしい気持ちを率直に表現した付句。

【二句立】来てほしいなあ。あの人だって、そこまで無情ではあるまいから…。

【現代語訳】あの人を落ち着いて待っていられないで、いつそ私が行くかと思っっている道のほとり、ここにあの人が見れて欲しいものだ。あの人だってそこまで無情ではあるまいから…。

(三折・裏・五) 見えばや人も心なからじ

六十九 山里の花をかへさに折りわびて

【校異】山里の…⑤山の花 花をかへさに…④かへさに花を 花を…⑬花を⑩花を⑮他にも 折わひて ⑩折侘開はへ

【式目】春(花) 花近年或為四本之物余花は可在其中(一座三句物)(新式今案)

【語釈】○かへさ…帰りがけ。また帰り道。「かへさにもいかたをらむ山桜花におとらぬ家づともがな」(新後拾遺集・春下・花の歌とて・88・一品法親王寛尊)。「おりてたにいきうき花のかへさ哉」(萱草・春連歌・30、宇良葉・春・104、自然齋発句212にも入る)。「折りわびて…折ろうとしたがためらつて。折りにくく。「花のもとにはねぢ寄り、立ち寄り、あからめもせずまぼりて、酒飲み、連歌して、はては大なる枝、心なく折り取りぬ。」(徒然草・百三十七段)。

【付合】恋から春へと句境を転じ、春の山里からの帰り道を付けた。六十九句と合わせた場合、前句の「見ゆ」は「他の人に見えるようにする、見せる」の意となり、「心なからじ」は、風雅な美を感じ解する気持ちがあるだろうということとなる。

【一句立】山里の花を帰りがけに折ることをためらって。

【現代語訳】山里の土産として見せたいが、とはいえ、あの人も花の情趣を感じる気持ちがあるろう。山里の花を帰りがけに折るのはためらわれてしまう。

(三折・裏・六) 山里の花をかへさに折りわびて

七十 たづねよまたもなき桜かは

【校異】 たづねよ…⑧ たつよ⑬ たつねよ^か かは…⑦⑧ かい⑪ かは^り

【式目】 春(桜) 桜只一 山桜、遅桜など云て一紅葉一(一座三句物)

【語釈】 ○またもなき桜かは…二度と見られないような桜であるのかなあ。係助詞「か」と「は」を合わせた形で、感動のこもった疑問の意。…なのか。…かなあ。

【付合】家づとに花を折るのではなく、実際にこの桜を見てほしいと付ける。

【一句立】訪れなさいよ。これは、もう二度とは見られないような桜であるのかなあ。

【現代語訳】山里の花を帰りがけの土産に折るのはためらわれて。むしろ訪れなさいよ。これは、もう二度とめぐりあえないような桜であるのかなあ。

(三折・裏・七) たづねよまたもなき桜かは

七十一 ただになどあたら春日をつくすらん

【校異】 春日を…⑫春の日

【式目】 春 (春日)

【語釈】 ○ただに…ひたすら。もつばらに。ここでは、春の日を過ごすだけの意。既にこの語は第四十八句で使われている。「つもりくる人ゆへ深き我が思ひ／いくよかたゞに明し終つらん」(応仁元年夏心敬独吟山何百韻・81/82)。

「たゞにくらせる春はかひなし／難波江やあけほのかすむあまの家」(基佐集・春・55/56)。○あたら春日…素晴らしい春の日。「あたら」は名詞の前について、複合語のように、その名詞に「すぐれた」「立派な」といった意味を添える。「散ぬより桜は化の名を立て／くれにけらしなあたら春日」(初瀬千句第五百韻・53/54・専順/日晟)。○春日をつくす…春の長い一日をずっとそのことにみに過ごす。春は日照時間が長く、暮れがたい。

【付合】 花に目を奪われて時を忘れる様を付ける。

【一句立】 なぜ、せっかくの素晴らしい春の日をただ費やすだけなのだろうか。

【現代語訳】 訪れなさいよ。これは、もう二度とめぐりあえないような桜であるのかなあ。なぜこの素晴らしい春の日を、何もすることなく過ごすのだろうか。

(三折・裏・八) ただになどあたら春日をつくすらん

七十二 ね覚する夜のうつるだに惜し

【校異】 おし…①②⑬⑭うし ③⑫⑭なし

【式目】 雑 ね覚・夜(夜分)

【語釈】 ○ね覚する…眠りの途中でふと目覚めること。「秋ならでおく白露はねぎめするわがた枕のしづくなりけり」(古今集・恋五・757・よみ人知らず)。○うつる…過ぎていく。「春の夜のうつるをつくる鐘の声／おしむ弥生にたれかねてまし」(弘治三年春雪千句第九百韻・79/80・清誉/宗養)。

【付合】春の日の美に春夜の素晴らしさをも加える。

【一句立】目覚めた夜が過ぎていくのさえ惜しいのだ。

【現代語訳】どうして、せつかくの素晴らしい春の日をただ費やすだけなのだろうか。ふと目覚めた夜が過ぎていくのさえ惜しいのだ。

(三折・裏・九) ね覚する夜のうつるだに惜し

七十三 音聞けばよその時雨を枕にて

【校異】音きけは…⑨音に間は ⑩音に間 ⑮音にきけは よそ…③去年 ④外

【式目】冬(時雨) 枕(夜分) 時雨秋冬各一(一座二句物)

【語釈】○音聞けば…時雨の雨音を聞くと。「ねざめする床に時雨はもりこねどおとも袖のぬれにけるかな」(玉葉集・久安百首歌に・837・花園左大臣家小大進)。「たれもみち葉をうつろはてみん／をとぎけは篠田の森の夕あらし」(老葉(吉川本)・雑連歌上・1483/1484)。○よその時雨…(降ると思うともう)離れた場所で降っている時雨。時雨は、にわかに降り始め、瞬く間に降り過ぎていく驟雨である。「すむ山しらて雲もとまらず／竜田姫よその時雨やうらむらん」(下草・秋連歌・377/378)。「あま雲のよその時雨や松の色」(自然齋発句・1294)。

【付合】「ね覚」に「時雨」を付けた。「時雨トアラバ、…ね覚」(連珠合璧集)。「寢覚めしてあくるまつまの手枕にいく度すぐる時雨なるらん」(新拾遺集・雑上・1675・藤原俊頼朝臣)。

【一句立】雨音を聞いたたら、もう降り過ぎていく、そんな時雨の音を寢床で聞いて。

【現代語訳】雨音を聞いたたら、もう降り過ぎていく、そんな時雨の音を寢床で聞き目が覚めた。目覚めたこの夜の時が過ぎていくのさえ惜しいことだ(まして時雨が過ぎ去っていくのは惜しいのだ)。

(三折・裏・十) 音聞けばよその時雨を枕にて

七十四 くもらぬ月に物な思ひそ

【校異】 月：^{空イ}⑪⑬月

【式目】 秋(月) 月(夜分) 釈教(くもらぬ月)

【語釈】 ○くもらぬ月…雲に隠されていない月。また、真如の月をも意味する。「おとばかりいた屋の軒のしぐれにてくもらぬ月にふる木の葉かな」(風雅集・雑上・1589・祝部成国)。○物な思ひそ…物を思うことはない。元来、月は物思いをさせるものであり、また物思う涙で目に映る月は曇るものだが、ここはそうした世俗の煩惱に陥ってしまうことを制している。「月見れば千々に物こそかなしけれわが身ひとつの秋にはあらねど」(古今集・秋上・これさだのみこの家の歌合によめる・193・大江千里)。「なげけとて月やは物をおもはするかこちがほなるわがなみだかな」(山家集・恋・628)。

【付合】 「くもらぬ月」をつけることで、時雨と想った雨音は聞き間違いであったとする。「くれたけはまどうつあめのこゑながらくもらぬ月のもりあかすかな」(秋篠月清集・秋・月照窓竹・1189)。

【一句立】 くもりなく輝く月を見て、物思いをするのではないのだ。

【現代語訳】 雨音を聞いたたら、もう降り過ぎていった、そんな時雨の音を寢床で聞いたようだが、空には、くもりなく照る月が出ている。仏の尊い教えをあらわす、くもりなく見えているのだから、物思うことはないのだ。

(三折・裏・十一) くもらぬ月に物な思ひそ

七十五 荒らさずは宿にやほむ野辺の秋

【校異】 宿に：^{月イ}⑤⑥やとも 秋：^{月イ}⑪⑬秋

【式目】 秋(野辺の秋) 宿(居所)

【語釈】○荒らさずは…荒らさないなら。和歌・連歌ともこの句以外は管見に入らない。○野辺の秋：野原の秋の様子。野の秋のさまは、庭とは違う寂しさがある。「分ゆけはなみた催す野への秋／月やハしらん旅のかなしさ」（文明五年雪月五日何路百韻（雪の影）・51／52・満助／心敬）。「いつく庭ともわかぬふるさと／むしなけハマかきのうちも野への秋」（連調五百句・秋・658／659）。

【付合】月を眺めるのは、野辺の秋の風情を持たない宿からと付け、物を思うなとした前句を説明する。

【一句立】荒れた様子にしていなとして、家の庭においても野原の秋の風情を見ることができらうか、いや、できはしない。

【現代語訳】くもりなく輝く月に、物思いをすることはしない。荒れた様子にしていなとして、家の庭に、野原の秋の風情を見ることができらうか、いや、できはしない。

【他出文献】七十四・七十五句の付合は『下草』秋連歌365・366に入る。

（三折・裏・十二）荒らさずは宿にやはみむ野辺の秋

七十六 虫のいろいろ乱れてぞ鳴く

【校異】 いろ／＼…①②こゑ／＼

【式目】 秋（虫） 虫（二座一句物）

【語釈】○いろいろ…様々な音色で。和歌においては「いろいろ」は本来は花に用いられ、そこに鳴く虫にも使用が及んだ。「いろいろに身にしむ野べの虫の音はちくさの花にたぐふなりけり」（拾玉集・虫声非一・853）。「むしのねも千くさのはなにつろひていろいろにこそこゑはきこゆれ」（経家集・百首中に、虫声非一・32）。○乱れてぞ鳴く…思い思い自由に鳴く。「あさちふの露吹結ぶ木枯にみたれてもなく虫の声かな」（源順集・むしの音・156）。

【付合】脅かされることなく、存分に鳴いている虫たちを詠む。

【一句立】 虫たちが思い思い、自由に鳴いていることだ。

【現代語訳】 荒れた様子にしていなければ、家の庭で、野原の秋の風情を見ることができようか。だがここでは、虫たちが思い思い、自由に鳴いているのだ。

(三折・裏・十三) 虫のいろいろ乱れてぞ鳴く
七十七 待ちいづる風のとだえに露置きて

【校異】 ※底本は「とたへ」であるが「とだえ」と表記を訂正した

とたへ：②⑤⑥とたえ ④とたへ ⑦⑧とくら

【式目】 秋(露)

【語釈】 ○待ちいづる…待ち受けて、得ること。月の出を言うことが多い表現。「月まちいつる夜半のとをやま／あき風に夕浪わたる舟とめて」(三島千句第七百韻・72／73)。○とだえ…途切れること。「春の夜のゆめのうき橋とだえして峰にわかるる横雲のそら」(新古今集・春上・守覚法親王、五十首歌よませ侍りけるに・38・藤原定家)。「吹をくる風もしはしとたえして／はしると見えし舟そうかへる」(老耳・580／581)。「槿ハつほむもふかき葉伝ひに／風のとたえのしるき夕露」(羽柴千句第八百韻・43／44・紹巴／兼如)。○露置きて…露が置いて。露が草木の葉に付着しても、風が風いである間は吹き散らされることがない。「涙はいろに先そいてぬる／くる、野に虫の音またぬ露置て」(心玉集・秋・426／427)。「おはなもや月を、そしとまねくらん／風のとたえのゆふくれの露」(安宅冬康連歌集・515／516)。

【付合】 前句の「虫」に「露」を付けた。虫の声が聞こえ、野に露が置く秋の情景とする。「虫トアラバ、…露」(連珠合璧集)。

【一句立】 ずっと待っていた風の絶え間のあいだに、露が置き。

【現代語訳】 虫たちが思い思い、自由に鳴いていることだ。待っていた風の絶え間のうちに、露が置いて。

(三折・裏・十四) 待ちいづる風のとだへに露置きて

七十八 しほれもやまじ小舟さす袖

【校異】 やまし…⑨⑩やます⑬やまし袖…人袖

【式目】 雑 小舟(水辺・体用之外(新式今案))

【語釈】 ○しほれもやまじ…濡れ続けているようだ。「しほる」は、下二段動詞。濡れてぐっしよりとなること。第五十句にも出る。○小舟さす…流れに棹をさして小舟を進めること。「小舟さす宇治の川長わたるらしさほのをとする水の朝きり」(草根集・巻五・河上霧・360)。「月はあり明にすみ渡るそら／小舟さす八十宇治川の秋の水」(園塵第三・秋・2860／2861)。「荇すてし芦一村の秋のかせ／薄霧かくれ小舟さすそて」(明応九年七月七日何人百韻「年に有て」・81／82・基佐／宗波)。

【付合】 「露」に「袖」を付けた。「袖トアラバ、…露」(連珠合璧集)。前句の「風」を、舟路に吹く風とりなし、水辺に景を転換する。風を待つうちに、冷えた袖には露が置き、風にのって舟を漕ぐ時には、波もかかつて袖は濡れ続けるとした。

【二句立】 小舟をさす舟人の袖は、いつも濡れているのだろう。

【現代語訳】 追い風を待つ、風の絶え間のうちに、袖には露が置いていて。小舟をこぐ舟人の袖は、波に濡れ続けもしているだろう。

(名残折・表・一) しほれもやまじ小舟さす袖

七十九 降り立つを思へ葦刈るわざなれや

【校異】 おりたつを…①下たつを ③をりたつも おもへ…⑬おもへ

【式目】 秋(葦刈る) 葦(植物)

【語釈】○降り立つ…泥に足を踏み入れる。この言葉は、元来は田子が苗代で働く様子に使われ、歌に詠まれる。「けふいかぬれそふそでをほしやらでおりたつ田子のさなへとらん」(続後撰集・夏・199・少将内侍)。田子が苗代に降り立つと、裾や袖が濡れてしまう。「こひぢにもおりたちぬればよそに見したごのもすそをたもとにぞしる」(千五百番歌合・恋一・2267・越前)。さらに濡れた袖から、恋情を示唆する詠み方もある(↓八十句【付合】)。「たび衣おりたつたごにあらねども宮こ恋ぢに袖はぬれつつ」(春の深山路・37)。「よそにきくなはしろみづにあはれわがおりたつなをもながしつるかな」(金葉集・別・かへし・335・藤原兼房朝臣)。ただし、宗祇は、田子ではなく、葦刈小舟から舟人が降り立つ様子を意識させている。○葦刈るわざ…晩秋に、葦を刈る生業。また、「あしかる」には「悪しかる」を掛ける。「難波がたしげりあへるはきみがよにあしかるわざをせねばなるべし」(拾遺集・つのかみに侍りける人のもとにてよみ侍りける・538・ただみ)。「あし刈わさに身をなつくしそ／ふみ初めていつか恋路の果ならん」(池田千句第九百韻・44／45・泰諶／宗哲)。○わざなれや…仕事だからであろうか。

【付合】前句の「袖」に「降り立つ」を付け、さらに葦刈るわざを示したことにより、前句の「小舟」を漕ぐ際に常に濡れていた舟人の袖は、舟から降りて葦を刈り取る時も濡れているとした。なお、この時、「小舟」は葦を運ぶ芦刈小舟をイメージでき、葦の名所、難波潟の貧しい舟人の様子となる。

【一句立】足を踏み入れるのことを考えなさい、それが葦を刈ること、つまり悪い所業であるかどうか。

【現代語訳】舟人の袖は、いつも濡れているようだ。泥に足を踏み入れて降り立った時のことを考えてごらん、葦を刈る生業だから、袖が舟を降りても濡れているのだろうか。

(名残折・表・二) 降り立つを思へあしかるわざなれや

八十 恋路にいかでたがふ心ぞ

【校異】たかふ…⑤⑥まよふ

【式目】 恋（恋路）

【語釈】 ○恋路：恋の道。「おりたちてこひぢにみゆるたごしあればなにかを山だうちもかへさむ」（大齋院前の御集・276）。○たがふ心：相手の、自分とは違う感情。「うき身にはたがふころもみるばかりなどわすれよと契らざりけん」（為家千首・恋・733）

【付合】 「降りたつ」に「恋路」をつけた。苗代に降り立った田子の濡れた袖により恋のイメージを詠むのが一般的である。しかし、宗祇は「葦刈るわざ」を加え、「葦刈る」と「悪しかる」を掛けることで、一捻りしている。

【二句立】 恋の道において、どうして間違った思いを抱くのであろうか。

【現代語訳】 恋路に踏み込むことを思ってくれ、あなたにとってはよくないことなのだろうか。恋の道において、なぜあなたは私と違った思いを抱くのだろうか。

（名残折・表・三） 恋路にいかでたがふ心ぞ

八十一 世やはうき誰うらめしき人ならむ

【校異】 なし

【式目】 恋（うらめしき）

【語釈】 ○世やはうき：二人の仲は、つらく苦しいものなのか。「よやはうきひとやはつらきおほかたはただわれからとおもひなりぬる」（明日香井和歌集・雑・378）。○誰うらめしき人ならむ：誰が自分にとり、残念で悲しい思いをさせる人なのか。和歌においては、前項で見たように「世やはうき」「人やはつらき」と対にして初句二句に置き、自問自答する言い方があり、ここは「人」の方をあえて強調している。

【付合】 前句の「たがふ心」の原因を並べて付ける。

【二句立】 二人の仲というのはつらいものなのか。一体誰が、うらめしい思いを私にさせる人なのだろうか。

【現代語訳】恋の道において、なぜあなたは私と違った思いを抱くのだろうか。二人の仲というのはつらいものなのか。一体誰が、うらめしい思いを私にさせる人なのか。

【他出文献】八十句・八十一句の付合は、『新撰菟玖波集』恋連歌中、1713・1714、また『下草』827・828に入る。

(名残折・表・四) 世やはうき誰うらめしき人ならむ

八十二 老をな責めそかからざらめや

【校異】 な：①や せめ：④せら かゝらざらめや…⑦⑧かゝざらめや ⑩かゝらましやは ⑬かゝらましやは

【式目】 雑 老只二鳥木などに一 (一座二句物)

【語釈】 ○な責めそ…せめるな。○かからざらめや…こんな風でないのだろうか。「みるたびにかがみの影のつらきなかからざりせばかからざらまし」(和歌色葉397)。

【付合】 思うにまかせない人生は、歳を取ったからといって、そもそも変わるものでもないと付ける。

【二句立】 年老いたことを責めてくれるな。老いていなければ、こんなふうでないのか、いや、若くても同じなのだ。

【現代語訳】世の中というのはつらいものなのか。一体誰が、うらめしい思いを私にさせる人なのだろうか。年取ったことを責めてくれるな。若かったらこんな風ではないのか、いや、若くても同じなのだ。

(名残折・表・五) 老をな責めそかからざらめや

八十三 秋は時雨冬は霜夜にふしわびて

【校異】 なし

【式目】 冬 (霜夜) 時雨秋冬各一 (一座二句物) 『下草』では、前句 (八十二句) と共に冬連歌に入る。

【語釈】 ○時雨…晩秋に降るにわか雨。夜半に突然、時雨の雨音で眠りを破られることがある。「夢をだにまだむすばず

よさき枕ふしもさだめぬ時雨霰に」(拾遺愚草員外・冬・58)。「時雨」は七十三句にも出ており、七十三句は冬、今回は秋の物として詠まれている。なお、一句としての季は、『下草』の分類配列から、宗祇は冬の句と考えている。○霜夜：霜が降りる寒い夜。霜夜は気温が下がり、寒さに目覚める。「さえこほる霜よの床に伏侘びておきいでてむかふ埋火のあと」(沙玉集Ⅱ・埋火・148)。

【付合】老の身に起こる生活の不都合を対の形の説明にして付けた。

【一句立】秋には時雨の音に目覚め、冬には霜が降りる夜に寒さで寝られずにいて。

【現代語訳】年取ったことを責めないでくれ、年取っていないければこんな風ではないのだろうか。秋には時雨の音に目覚め、冬には霜が降りる夜に寒さで寝られずにいて。

【他出文献】八十二句・八十三句の付合は『下草』冬連歌403・404に入る。

(名残折・表・六) 秋は時雨冬は霜夜にふしわびて

八十四 木の葉ふりゆく暁の庵

【校異】 いほ：⑬庵^庵 ふりゆく：②④⑨⑩ふりしく

【式目】 冬(木の葉ふりゆく)「冬の心、…木の葉」(連珠合璧集)。 庵(居所・体) いほ一いほり一(一座二句物)

【語釈】 ○木の葉ふりゆく…木の葉が時をへて降り落ち、また枯れていく。「ふりゆく」は、古びていく、老いていくことを表現するが、ここは「古り」と「降り」をかけているか。「深草や里も古行秋ごと(ふるゆく)に／身のうきふしみ山な時雨

そ」(竹林抄・冬連歌・573・智蘊)。「惜しむべき月日流れて春もうし／我身ふり行く年の暮方」(竹林抄・冬連歌・680・宗砌)。「たのむ陰にそ木葉ふりそふ／石の上すみかたくともこゝろせよ」(諸家月次連歌抄・556／557・秀璠)。「神な月このはもしもにふりはててみねのあらしのおとぞさびしき」(中古六歌仙・落葉・246・登蓮)。○暁の庵：明け方の草庵の様子。「捨る身に世を秋風は猶烈し／露をまくらのあかつきの庵」(三島千句追加)

【付合】「時雨」「霜」のせいで、横たわりながら古びていく、別の具体物として「木の葉」を付け、情景描写へと句境をすすめた。木の葉は時雨や霜によって色づき古びていく。

【二句立】木の葉が枯れ、降り落ち、古びていく、そんな暁方の庵の様子。

【現代語訳】庵の中では、秋には時雨の音に目覚めて眠れず、冬になると霜が降りた夜の寒さで寝られずにいる。暁方になれば、木の葉が古びて降り落ちていくのが見える、そんな庵に住んでいることだ。

(名残折・表・七) 木の葉ふりゆく暁の庵

八十五 かげさびし嵐や月に残るらん

【校異】さひし…①寫し ③陰 ⑤⑥⑨⑩影

【式目】秋(月) 嵐(吹物) 嵐(一座一句物)

【語釈】○かげさびし…月の光が寂しげに照っている。「浅茅生のかけさひしくも月深て露もほのかに岡のへの屋と」(言綱御詠草・岡上月・374)。○嵐や月に残るらん…嵐が月のあるあたりに残ってまだ吹いているのだろうか。「音たてし嵐や松に残るらんさざ波こほるしがのから崎」(新拾遺集・冬・643・権大納言宣明)。「かたふけと月はなを澄天の戸に／あらしそのこるあかつきの秋」(永原千句第四百韻・5／6・印孝・宗哲)。

【付合】「木の葉」に「嵐」を付けた。「嵐トアラバ、嶺の木の葉」(連珠合璧集)。前句は、嵐により、木の葉が音を立って降る山里の庵の様子となる。夜半の嵐の風が、しらんできてもまだ吹き残っていて、暁方には、散る木の葉も見えてくる。「神な月ねざめにきけば山ざとのあらしのこゑはこのはなりけり」(後拾遺集・冬・十月ばかり山ざとによるとまりてよめる・384・能因法師)。「かみな月このはふきおろすあげがたのみねのあらしのこのる月かげ」(秋篠月清集・冬・664)。

【二句立】月の光が寂しげに照っている。嵐が月のあるあたりに残って吹いているのだろうか。

【現代語訳】 風で木の葉が降り散っている、暁方の庵の庭の様子。空の月の光が寂しげだ。嵐が、空の月のあるあたりに残って吹いているのだろうか。

【他出文献】 八十四・八十五句の付合は『下草』秋連歌341・342に入る。

(名残折・表・八) かげさびし嵐や月に残るらん

八十六 山寒げにも松虫ぞ鳴く

【校異】 さむけにも…③侘ひけにも ⑫さひしくも

【式目】 秋(松虫) 山(山類・体) 松虫(一座一句物)

【語釈】 ○寒げ：寒そうな様子。山の木々が葉を落とし、山肌が透けて寒そうな様子であることをいう。「かへりもやらす鳥のなくこゑ／山はなを雪さむけにてかすむ野に」(下草・春連歌・11/12)。○松虫ぞ鳴く…：松虫が鳴いていることだ。「あき風のややふきしげばのをさむみわびしき声に松虫ぞ鳴く」(後撰集・秋上・261)。「とふ人も今はあらしの山かぜに人まつむしのこゑぞきこゆる」(拾遺集・秋・題しらず・205・よみ人知らず)。

【付合】 「嵐」に「山」「松虫」を付けた。「嵐トアラバ、山」「松虫トアラバ、嵐」(連珠合璧集)。虫は草むらにひそみ鳴く。「ふけゆけば虫の声のみ草にみちてわくる人なき秋の夜の野べ」(玉葉集・秋上・606・院御製)。木々が葉を落とし山が寒そうな様子になる時、木々の下草、野の草も枯れている。植物の衰えの中、まだ命をつないでいる虫の姿を詠む。なお、既に七十六句に一座一句物の「虫」を使っており、ここでは、名虫を懐紙を替えて出す。「所詮如新式者虫之外、松虫、鈴虫等、各替懐紙可用之」(新式今案)。

【一句立】 山が寒そうな様子になっても、松虫は鳴いていることだ。

【現代語訳】 空の月の光が寂しげだ。嵐が、空の月のあるあたりに残って吹いているのだろうか。山が寒そうな様子になっても、松虫は鳴いていることだ。

(名残折・表・九) 山寒げにも松虫ぞ鳴く

八十七 よるかたもあらじすみかに秋は来て

【校異】 よる…⑦⑧よき⑩よく⑫□(破損)る⑬よる も…①に

【式目】 秋(秋は来て)

【語釈】 ○よるかた…身を寄せるところ。虫ならば草むら。「たのむかけそと松も哀れめ／むしの声よるかたなげに草枯て」(壁草・687／688)。

【付合】 木々が葉を落とし、山が寒そうな様子になった時、虫の居場所がないさまを思いやった。

【二句立】 身を寄せるところもないのだろう。すみかに秋が来てしまつて。

【現代語訳】 山が寒そうな様子になつても、松虫は鳴いていることだ。身を寄せるところもないのだろう。すみかの草むらに秋が来て枯れてしまつて。

(名残折・表・十) よるかたもあらじすみかに秋は来て

八十八 人の心の見ゆる夕暮れ

【校異】 なし

【式目】 恋(人の心)

【語釈】 ○人の心…あの人の気持ち。「来ぬ暮を人の心のおとなれや／文を見るにもおもひたえけり」(表佐千句第四百韻・39／40・甚昭／氏忠)。

【付合】 前句の「秋」に「飽き」を掛け、恋の句に転換する。

【二句立】 あの人の気持ちがよくわかる夕暮れ時。

【現代語訳】 立ち寄るところでもないのだろう。私のこのすまいには秋が来て、あの人の気持ちにも飽きがきてしまつ

て。あの人の気持ちがよくわかる夕暮れ時であることよ。

(名残折・表・十二) 人の心の見ゆる夕暮れ

八十九 よむ歌やなを身の憂きを種ならん

【校異】 うき…③⑨⑩うき⑪うき⑮うき

【式目】 述懐(身の憂き) 「述懐の心、うき世…うき身…うき」(連珠合璧集)

【語釈】 ○よむ歌…詠歌。「後の世までの名をはおほし／うき時のすきみはかりと読む哥に」(老葉(吉川本)・雑連歌上・1541/1542)。○身の憂き…つたない我が身ゆえ、思うようにならないつらさ。「かずならぬみのうきことをつくづくとおもひねまちの月をみるかな」(為忠家後度百首・寝待月・348・伊豆守為業)。「身のうきか人のつらきかさりとともとおもふ日数をとほで過ぎぬる」(玉葉集・雑五・ことありて伊豆国にながされ侍りけるを、おそくとひける人に申しつかはしける・2571・法印忠快)。○種…題材、素材。内容。「やまとうたは人の心を種として、よろづの言の葉とぞなれりける」(古今和歌集仮名序)。

【付合】 前句との間では恋の付合と取ることも可能だが、一句では述懐の句。

【一句立】 詠む和歌はやはり、この身の至らないつらさを内容とするのだろうか。

【現代語訳】 あの人の気持ちがよくわかる夕暮れ時。あの人を思つて詠む和歌はやはり、わが身ゆえに思われなかつらさを内容とするのだろうか。

(名残折・表・十二) よむ歌やなを身の憂きを種ならん

九十 思ひをのべば物ごとになり

【校異】 のへは…⑬のへよ、物ごとになり…⑨⑩もとのことよりは

【式目】 述懐（思ひ）

【語釈】 ○思ひをのべば…気持ちを口に出して言えば。「のぶ」（述ぶ）は下二段活用 of 動詞。○物ごと…その物ごとに。何事につけても。「折節のうつりかはるこそ、物ごとにあはれなれ」（徒然草・十九段）。「ももちどりさへづる春は物ごとにあらたまれども我ぞふり行く」（古今集・春上・28・よみ人しらず）。「はかなき夢はあともとゝめす／物ことに人と同じくあらはれて」（萱草・雑連歌・1325／1326）。

【付合】 歌の素材となる心の思いはあらゆることにつけてあるのだと、付句であらためて句境を広げる。一句では述懐の句となる。

【一句立】 気持ちを口に出せば、何につけても思うことがあるのだ。

【現代語訳】 詠む和歌はやはり、わが身のつらさを内容とするのだろうか。気持ちを口に出せば、何につけても思うことがあるのだ。

（名残折・表・十三） 思ひをのべば物ごとにより

九十一 咲く花のかたはら遠くかすむ野に

【校異】 かたはら…①側ハ 野に…⑭野□（破損）

【式目】 春（花・かすむ） 花近年或為四本之物余花は可在其中（一座三句物）（新式今案）

【語釈】 ○咲く花のかたはら…咲いている花の近く。「かたはら」は和歌に使われにくい語であるが、正広、宗祇、三条西実隆、後柏原天皇などの歌に、「花のかたはらの深山木」を詠む形で集中的に見られ、一時的に歌に持ち込まれ流行したことが知られる。「かすめども空ぞ明けゆくほのぼのと月をば花のかたはらにして」（松下集・寄曙花・1948・明応二年（1493）二月五日詠）。「馴れぬとはなにわするなみ山木のかたはらにだにあらじわが身を」（宗祇集・春・交花・36）。

【付合】前句の「物ごと」に、関して、近傍から遠方まで見はるかす句を付けた。述懐が既に二句連続しているの、咲き誇り衆目を集める美しい花の傍にひっそりとたつ光の当たらない深山木を詠むこともできたが、ここでは、花の傍から離れ、遠方の野を視野に入れた。「述懐々舊引合て三句にすぐべからず」（連珠合璧集）。なお、「花」は他に十三句、四十五句、六十九句と、各折にある。

【二句立】咲いている花のそのかたわらから、遠く霞んでいる野へ。

【現代語訳】咲いている花のそのかたわらから、遠く霞んでいる野へと、気持ちを口に出すなら、様々な物ごとにその美しさについて述べることもあるのだ。

(名残折・表・十四) さく花のかたはら遠くかすむ野に

九十二 林をしめてすめるのどけさ

【校異】 のとけさ…⑭のと□□(破損)

【式目】 春(のどけさ)

【語釈】 ○林をしめて…林のあたりを敷地として。「をみなへしにほふあたりののをしめてあきのよなよなたびねをぞする」(能宣集・237)。「野をしめてひくこそ松の初子なれ／かすむ朝になくやうくひす」(文安雪千句第八百韻・37／38・頼重／龍忠)。「かしこきはかすめる山にいほしめて／をろそかなるは軒の草葺」(小鴨千句第九百韻・61／62・心恵／専順)。「田つらをしめて冬こもるかけ／水こほるつゝみにぬるやかりのこゑ」(那智籠・854／855)。○のどけさ…穏やかさ。うららかさ。「世中にたえてさくらのなかりせば春の心はのどけからまし」(古今集・春上・なぎさの院にてさくらを見てよめる・53・在原業平)。

【付合】花の咲く里をや離れた林に居を構える様を付けた。花を間近にしないゆえに、散る花に心乱れることもない場所であることが意識されている。

【一句立】 林のあたりを自分の家として住んでいる、そのうららかさよ。

【現代語訳】 咲いている花のそのかたわらに、遠くに霞んで見えている野、その林のあたりを自分の家として住んでいる、落ち着いたのどかな様子であることよ。

(名残折・裏・一) 林をしめてすめるのどけさ

九十三 聞かじただ春は幾日の鐘の音

【校異】 いくか：⑧いくつ をと：①聲 ②⑦こゑ⑬音^声

【式目】 春(春は幾日)

【語釈】 ○聞かじただ：聞くまいよ、それでももう。胸に迫る気持ちを引き起こす鐘の音を聞くまいとするさま。「きかじただ秋かぜさむぎ夕附日うつるふ雲にはつかりのこゑ」(玉葉集・秋上・585・前大納言為家)。「よそにうつるふ事なしらせそ／きかした、いほりあまたの郭公」(老葉・夏連歌・231/232)。○春は幾日：春はあと何日もないであろうということ。古今集の「ぬれつつぞしひてをりつる年の内に春はいくかもあらじと思へば」(古今集・春下・やよひのつごもりの日、あめのふりけるにふぢの花ををりて人につかはしける・133・なりひらの朝臣、伊勢物語八十段)による表現。○鐘の音：一日の終わりを告げ知らせる。

【付合】 春を穏やかに過ごす様子を詠んだ前句に、その気持ちを乱す鐘の音を聞くまいとする様子を付ける。桜の花は、散ることで春が過ぎゆくさまを知らせ、心を乱す景物であったが、鐘の音も、時を知らせることで、春をいつまでも味わっていたい心を乱すものである。

【一句立】 聞くまいよ、もう。春があと何日もないということを告げ知らせる鐘の音を。

【現代語訳】 林のあたりを自分の家として住んでいる、そんなのどかなさまだ。それでも、ただもう聞くまいよ。春があと何日もないということを告げ知らせる鐘の音を。穏やかな気持ちが乱れるから。

(名残折・裏・二) 聞かじただ春は幾日の鐘の音

九十四 光も陰もげにぞはかなき

【校異】 ひかりもかけも：⑩⑬ひかりも影も⑮ひかりのかけも はかなき：⑭はかな□(破損)

【式目】 雑

【語釈】 ○光も陰も：時間というものは。時が刻々と移り変わるさまを含んだ言い方。「夢のうちなる身を歎くなり／程もなく光と陰のうつるまに」(菟玖波集・雑連歌四・1463 詫阿上人)。「さもあらばあれとてなどか急らむ(いそぐ)／光の陰ぞ人を思はぬ」(竹林抄・雑連歌上・1237 心敬、新撰菟玖波集3087／3088)。「春よりのちも夢の一とせ／いつのひかりいつのかけをか憑むらん」(老葉(宗訊本)・1175／1176、『愚句老葉』1340／1341(注はない))。「咲ぬとて人をもまたし桜花／ひかりもかけも猶夢の春」(池田千句第七百韻・67／68・玄清／宗碩)。○げにぞはかなき：本当にはかないものだ。「人の世もわか世もいさや明日川／水のあはより実そはかなき」(菟玖波集・雑連歌三・2757／2758 伊勢大輔)。

【付合】 人を待つてはくれない時の流れを、あらためて噛み締める形で付けた。見聞きするものにしたやすく心を奪われ、心静かに生きられない人の性を痛いほど理解した上での句。

【一句立】 時は本当にはかなく移り変わっていくのだ。

【現代語訳】 聞かまいよ、もう。春があと何日もないということを告げ知らせる鐘の音を。春という季節の時は、本当にはかなく消えてしまうものなのだ。

【備考】 宗祇は、『浅茅』において、【語釈】に掲出した心敬句(『竹林抄』1237)について、「此前句にかく付侍る事、作者の粉骨なり。まことにやるかたなく大事なる前にや。かく付給ふ事、一句はやすくと侍れど、心も又おもしろくや」と述べ、その深い内容を非常に評価している。また、やはり【語釈】に既に示した『老葉』(宗訊本)1176句では、過ぎ去る春だけでなく、いつもはかなく頼むことのできない、時の流れを詠みいだしている。こうした点からも、九十四句は、こぼれ落ちていく人生の時に関する、宗祇のしみじみした感慨の表現と受け取れよう。

(名残折・裏・三) 光も陰もげにぞはかなき

九十五 照射する片山川の鵜飼舟

【校異】 なし

【式目】 夏(照射・鵜飼舟) 舟(水辺・体用外)

【語釈】 ○照射^(ともし)：鹿を射る獵の一方法。夏の闇夜に、山中でかがり火を燃やし、松明をともして鹿を誘い、寄ってきた鹿の目の、火影の反射を的にして射る。「ともしトアラバ、やみ 星」(連珠合璧集)。○片山川^(ともし)：山の片側に沿ってある川。「雨過る片山川のにこりきて／三室の奥を出る立田路」(文安月千句第十百韻・11／12・良珍／自篋)。「朽てさきちる花たにもなし／春過るかた山川の捨小舟」(河越千句第一百韻・36／37・道真／心敬)。「氷をくたく袖の木からし／紅葉ちる片山川の夕渡り」(萱草・667／668)。○鵜飼舟^(ともし)：鵜舟。鵜飼は、夏の闇夜に、鵜舟に乗って篝火を燃やし、鵜を操って鮎を飲ませ、それを吐かせて鮎を捕らえる漁法。「かけくらしかた山本の鵜かひ舟月にもさすやせゝのかゝり火」(今川為和集・鵜河・164)。

【付合】 闇夜に行う山と川の漁を「片山川」で同時に想起させるように付け、かがり火の光の交錯する闇を表現し、さらには狩られる生き物の命のはかなさをも意識させた。

【一句立】 照射をしている山の片側を流れている川には、鵜飼舟が浮かんでいる。

【現代語訳】 光も陰も実にはかないものだ。照射をしている山、その山の片側を流れている川には、鵜飼舟が浮かんでいる。

【他出文献】 九十四・九十五句の付合は『下草』秋連歌231・232に入る。

(名残折・裏・四) 照射する片山川の鵜飼舟

九十六 水より早し明る夏之夜

【校異】 はやし：④⑮はやく

【式目】 夏（夏の夜）水（水辺・用）

【語釈】 ○水より早し：水が流れるよりもはやい。夏の夜の明けやすさの表現。「すゝしきは水よりふかし秋の空」（宇良葉・越後府延命寺にて・260）。○明る夏の夜：夏の夜が明けていく様子。夏の夜は明けやすさが詠まれる。「夏の心、みじか夜（夏の夜 明やすき夜）」（連珠合璧集）。「五月雨に水浪まさるまこも草みじかくてのみ明る夏のよ」（拾遺愚草・初学百首・夏・28）。「うかひ舟夕やみいそぎさささをの取りあへぬまにあくる夏の夜」（寂身法師集・鶴河・317）。「月はのこりてあくる夏の夜／ほととぎす雲のいつくにやとるらむ」（新撰菟玖波集・夏連歌・459／460・常信法親王）。

【付合】 夜中の水上の狩りに、夏の夜の明けやすさを付ける。

【一句立】 夏の夜の明るくなる速度は、水が流れるよりも早い。

【現代語訳】 闇の中で照射をしている山、その山の片側を流れている川では、やはり闇に鵜飼舟が浮かんでいる。しかし、夏の夜の明るくなる速度は、水が流れるよりも早く、たちまちに夜が明けるのだ。

（名残折・裏・五） 水より早し明る夏の夜

九十七 さざ波や声声しのおりはへて

【校異】 や：①②③④⑤⑥⑨⑩⑫⑭⑮の ⑬のこゑ：⑪聲⑬聲

【式目】 雑 さざ波（水辺・用）

【語釈】 ○さざ波や声声：校合伝本は、いずれも「さざ波の」としており、『下草』、『下草注』（広大本）もいずれも「さざ波の」である。後述の難語「河社」との関連から「の」がふさわしいかと思われるが、ここでは『宇良葉』本文を尊重しておく。「さざ波」は、古くは「ささなみ」と清音であり、中世以降濁音となる。細かく、小さな波。「夏の夜

の月は涼しき明かたに／はちす葉かほる池のさゝなみ」(永原千句第二百韻・13／14・重泰／宗坡)。

「さざ波」に関しては、宗祇周辺でもよく詠まれる語であるが、「さざ波や」に「声声しのおりはへ」と表現する句は、この句以外、管見に入らない。ただし、「さざ波の声」となると、和歌では、『正治初度百首』に「ゆふかけてさかきをいはふ川社をりめづらしきさざ浪の声」(正治初度百首・夏・1238・藤原隆信)、正徹の「川社しのに月影神さびてうたはぬ瀬々のさゝなみのこゑ」(草根集・河夏月・8876・康正元年四月二十日詠)があり、連歌では「かくらにうたふさゝなみのこゑ／ひくことの水のしらへも深き夜に」(享徳二年千句第十百韻・28／29・日晟／賢盛)がある。これらは神楽歌「篠波」の曲名を響かせており、難語「河社」を詠みこむ歌があることから、「河やしろしのにをりはへほす衣いかにほせばかなぬかひざらむ」(新古今集・夏・延喜御時屏風に、夏神楽の心をよみ侍りける・1915・紀貫之)と関わる。

「河社」に関しては、この語を詠む貫之歌は二首あり、新古今集1915歌と、「行く水の上にはいはへる河社川なみたかくあそぶなるかな」(貫之集・夏かぐら・484)である。歌の情景から「河社」は水無月祓の際に、川中か川のほとりに設ける社と考えられ、清輔の説「是は夏神楽のこと也。神楽は冬する事を、おのづからにはかなる事にて、夏などする時には清き川のほとりにてする也。…これを河社と言ふなり」(奥義抄、顕昭『袖中抄』も同様)がある。他に、俊成の説「河のいはせにおちたぎつをとたかく、しらなみ、なぎりて、つゞみなどのやうにきこゆる所を、河社といふ也。江帥匡房卿、かはやしろ秋はあすぞとおもへばや波のしめゆふ風のすゞしさといへる、この心也。」(『僻案抄』付載「かはやしろ」)もあるが、「河社」と「さざ波の声」を合わせ用いる和歌の用例は、清輔説を意識していると思われる、宗祇の句もその流れを汲んでいよう。なお、『連珠合璧集』にも「夏神楽トアラバ、川やしろ」とある。

○しのおりはへて…しきりに、いつまでも続いて。「おりはふ」は、絶え間なく。「河やしろしのにをりはへほす衣いかにほせばかなぬかひざらむ」(新古今集・夏・延喜御時屏風に、夏神楽の心をよみ侍りける・1915・紀貫之)を本歌とする。「かの「河社しのに」といへる(新古今集1915番のこと 稿者注)は、繁く、常などいへる、古き詞也。万葉集

などにも詠みつかひて侍めり。「おりはへて」といふ、又同事也。」(六百番歌合・恋九の十九番判詞(藤原俊成))。

【付合】「さざ波」を神楽の名に掛けて水無月祓の夏神楽の光景にとりなした。

【一句立】さざ波が、いつまでも音をたて続ける(神楽歌の篠波を何人もで歌う声が幾度も幾度も続くことだ)。

【現代語訳】夏の夜の明るくなる速度は、水が流れるよりも早い。はや夜が明けてくる中で、さざ波が、いつまでも音をたて続け、神楽歌の篠波を何人もで歌う声が幾度も幾度も続くことだ。

【他出文献】九十六・九十七句の付合は『下草』夏連歌255・256に入る。夏連歌の巻軸に置き、水無月祓の句である事を示す。

【考察】『下草注』(広大本)は、「さ、浪の声くくとハうたひものゝ名のり夏神楽のうたひとや、可尋、しのおりはへてとは、しけうおりはへうたふなり、これも河やしるしのおりはへほす衣いかにほせはか七日ひさらん、などいへる風情にや、いかさまにもおもしろき風姿とみえたり」と注する。注を付した宗長も貫之歌を六条家の清輔、顕昭の説で理解していると考えられ、宗祇の句に関して貫之歌を指摘し、夏神楽の話を何度も繰り返して歌う事と理解している。なお、宗長には、「折延^{おりは}へ水に御祓する頃／夏衣日もやや薄く暮れ初めて」(新撰菟玖波集・夏・569/570)の句例があり、貫之歌の難義を学んでいたことがわかる。

(名残折・裏・六) さざ波や声声しのおりはへて

九十八 初風立ちぬ柳散る陰

【校異】 かけ：①②⑭比 本句欠：⑮

【式目】 秋(初風・柳散る) 柳只一 青柳一 秋冬の間一(一座三句物)

【語釈】 ○初風：季節の初めに吹く風。ここは秋の初めに吹く風。「露くたく草のたもとやすけなき時なりけりな秋の初かせ」(永享九年正徹詠草・早秋・32)。「はつ風すゝしやなぎちるかけ／から衣うらめつらしくたつ秋に」(三島千句

第十百韻・8／9)。「こゝもかしこも秋やうからん／荻の葉に初風しるく吹たちて」(東山千句第七百韻・80／81・雪／宗長)。○柳ちる…秋になり、柳の葉が散る様子。「むら鷺は山本とをく飛消て柳ちるなり秋の河風」(草根集・河鳥・7633・享徳元年七月二十日詠)。「いつしかさひしならのふるさと／柳ちるさほの川風今朝吹て」(萱草・秋連歌・北畠大納言家にえらひ給へる百句のうちに・442／443)。

【付合】夏の終わりの神楽を響かせた前句から、時を進め、秋の始まりを付けた。

【一句立】柳の葉が散る陰には秋の初風が吹きたった。

【現代語訳】夏の終わりに、さざ波がいつまでも音をたて続け、神楽歌の篠波を何人もで歌う声が幾度も幾度も続くことだ。そして、柳の葉が散る陰には秋の初風が吹きたった。

(名残折・裏・七) 初風立ちぬ柳散る陰

九十九 露乱れひぐらし鳴きて残る日に

【校異】 のこる…⑨⑩くる、

【式目】 秋(露・ひぐらし) ひぐらし(一座一句物) 露(可隔三句物・降物)

【語釈】 ○露乱れ…風で露が乱れて落ち。「涙をさそふ秋風はふけ／露みたれ木葉とまらぬ夕くれに」(下草・秋連歌・385／386)。○ひぐらしなきて…ひぐらしが鳴いて。「日ぐらしトアラバ、秋風」(連珠合璧集)。「秋の日のかげもさびし

き世の色にひぐらしなきてくるる山もと」(歌合永仁五年・秋日・2・中将)。○残る日に…まだ沈んでいない日の光に。

斜めに傾いている日暮れ時の太陽の光となる。「みればいまだ山のはたかく残る日に谷の戸くらす村時雨かな」(雪玉集・時雨・4110)。「柴とりかへる人もこそあれ／残る日に塩くむ浦の遠干かた」(萱草・専順法眼坊にての百韻に・1169／1170)。「をのゝ夕はたゝあきの風／のこる日も色こき稲に雁鳴て」(老葉・秋連歌・431／432)。

【付合】付句で時刻を夕暮れに設定した。

【二句立】夕風に露が乱れて落ち、ひぐらしが鳴いているが、傾いた日の光はまだ残っている、そんな夕暮れに。

【現代語訳】柳の葉が散る陰には秋の初風が吹きたった。風に露が乱れて落ち、ひぐらしが鳴いているが、傾いた日の光はまだ残っている、そんな夕暮れ。

(名残折・裏・八) 露乱れひぐらし鳴きて残る日に

百 身にしむ色はただ秋の空

【校異】 は…⑭か

【式目】 秋(秋の空) 空(一座四句物)

【語釈】 ○身にしむ色…藤原定家の著名な和歌の表現をとる。「しろたへの袖のわかれに露おちて身にしむ色の秋風ぞふく」(新古今集・恋五・水無瀬恋十五首歌合に・1336)。定家歌も、「あきふくはいかなるいろのかぜなれば身にしむばかりあはれなるらん」(詞花集・秋・109・和泉式部)をとる。本百韻では「秋の風」は五十一句に使われている。○ただ秋の空…「秋の空」は、眺める人につらく悲しい物思いをさせるもの。寂しき、やるせなさを喚起する。「心からながめて物をおもふかなわがためにうき秋の空かは」(続拾遺集・秋上・239・澄覚法親王)。「おほかたの秋のそらだにわびしきに物思ひそふる君にもあるかな」(後撰集・秋下・あひしりて侍りけるをとこのひさしうとはず侍りければ、なが月ばかりにつかはしける・423・右近)。また、「秋の空」は本百韻の三十一句(「わがさらむ秋の空かは待てしよし」)でも自らの終焉を象徴する空間として使われる。

【付合】 「露」に「身にしむ色」をつけた。定家の新古今¹³³⁶番歌を本歌とする。挙句に、祝意ではなく、人生に対する深く孤独な洞察をみせて終わる。

【二句立】 この身に深くしむような寂しい思いをさせるのは、ただ秋の空ばかりなのだ。

【現代語訳】 風に露が乱れて落ち、ひぐらしが鳴いているが、傾いた日の光はまだ残っている、そんな夕暮れ。この身

に深くしむような寂しい思いをさせるのは、ただ秋の空ばかりなのだ。

和歌の引用は、特に断らない限り、日本文学とシテ図書館内『新編国歌大観』による。『新編私家集大成』によった歌集は、『草根集』『永享九年正徹詠草』『後大通院殿御詠』『源順集』『言綱御詠草』である。
また『万葉集』は西本願寺本による。

【訳注引用文献拠一覽】

- 連珠合璧集：『連歌論集一』（昭和四七・三弥井書店）
寛正五年正月一日名所百韻「花の春」：江藤保定『宗祇の研究』（昭和四二・風間書房）
伏見院詠草（東京国立博物館蔵）：『新編私家集大成』
美濃千句：『千句連歌集四』所収大阪天満宮文庫本
老葉（毛利本）：『連歌大観一』
明応九年七月六日何船百韻「柳ふく」：江藤保定『宗祇の研究』（昭和四二・風間書房）
文明八年四月二十三日何船百韻「ことの葉の」：江藤保定『宗祇の研究』（昭和四二・風間書房）
太神宮法楽千句第一百韻：書陵部本（国文学研究資料館紙焼き写真）による。
称名院追善千句第八百韻：『連歌古注釈の研究』（昭和四九・角川書店）
竹林抄：新編日本古典文学大系『竹林抄』（一九九一・岩波書店）
菟玖波集：『連歌大観一』
新撰菟玖波集：『連歌大観一』
萱草：『連歌大観一』

- 下草：『連歌大観一』
- 宇良葉：国文学研究資料館紙焼き写真、『宗祇句集』（昭和五二・角川書店）
- 自然齋発句……『連歌大観一』
- 基佐集：書陵部蔵斑山文庫本『桜井基佐集』（古典文庫）
- 苔筵：『心敬作品集』（昭和四七・角川書店）
- 僻案抄：『日本歌学大系 別巻五』（昭和五六・風間書房）
- 池田千句：『千句連歌集七』所収静嘉堂文庫本（昭和六〇・古典文庫）
- 老耳：『連歌大観二』
- 文明十四年三月二十日何人百韻「ちきりあれや」：江藤保定『宗祇の研究』（昭和四二・風間書房）
- 合翠堂文庫蔵老葉付載宗祇付句：日文研連歌DB
- 明応九年五月七日何路百韻「またきより」：江藤保定『宗祇の研究』（昭和四二・風間書房）
- 明応九年七月七日何人百韻「年に有て」：江藤保定『宗祇の研究』（昭和四二・風間書房）
- 徒然草：『新日本古典文学大系 方丈記 徒然草』（一九九〇・岩波書店）
- 春の深山路：『新編日本古典文学全集 中世日記紀行集』（一九九四・小学館）
- 園塵：『連歌大観二』
- 寛正六年正月十六日何人百韻：『心敬連歌 訳注と研究』（二〇一五・笠間書院）
- 延徳四年六月朔日小松原独吟百韻：『宗祇名作百韻注釈』（昭和六〇・桜楓社）
- 表佐千句：『千句連歌集四』所収大東急記念文庫蔵本（昭和五七・古典文庫）
- 長享二年四月五日何路百韻「あらぬなを」：国文研本（新日本古典籍DBナ376）
- 応仁元年夏心敬独吟山河百韻：『心敬の生活と作品』（昭和五七・桜楓社）
- 文明五年雪月五日何路百韻「雪の影」：重松裕巳『宗祇時代連歌』（翻刻）（平成三・『連歌俳諧研究』八〇号）
- 成三・『連歌俳諧研究』八〇号）
- 連調五百句：『七賢時代連歌句集』（昭和五〇・角川書店）

壁草：『連歌大観二』

羽柴千句：北大附属図書館本（国文学研究資料館紙焼き写真）

心玉集：『連歌大観一』

和歌色葉：『日本歌学大系三』

諸家月次連歌抄：『連歌大観一』

那智籠：『連歌大観二』

三島千句：『千句連歌集五』所収鶴見大学蔵本

老葉（吉川本）：『宗祇句集』（昭和五二・角川書店）

老葉（宗訊筆本）：『宗祇句集』（昭和五二・角川書店）

河越千句：『千句連歌集五』所収内閣文庫蔵本（昭和五九・古典文庫）

永原千句：『千句連歌集七』所収菅原神社蔵本（昭和六〇・古典文庫）

小鴨千句（享徳二年千句）：『千句連歌集三』所収小松天満宮蔵本（昭和五六・古典文庫）

文安雪千句：『千句連歌集一』所収東大寺図書館蔵本（昭和五五・古典文庫）

下草注（広大本）：『連歌古注釈集』（昭和五四・角川書店）

浅茅：『連歌論集二』（昭和五七・三弥井書店）

奥義抄：『日本歌学大系一』

袖中抄：『歌論歌学集成第四卷』第四・五卷（平成一二・三弥井書店）

愚句老葉：『連歌古注釈集』（昭和五四・角川書店）所収金子金治郎氏所蔵版本

東山千句：『千句連歌集六』所収内閣文庫本

弘治三年春雪千句：『宮内庁書陵部蔵『賦物連歌』（上）』（後土御門内裏における和歌と連歌の総合的研究研究成果中間報告書（研究代表

者山本啓介）

※本稿はJSPS科研費「P17K02421「独吟百韻分析による宗祇連歌の多面的新研究」の助成を受けたものである。